

第109回 歌とともに甦った 復興の象徴「銀座の柳」

昭和37年秋、東京五輪を2年後に控えた頃、当時小学5年生だった私は公立小学校の鼓笛隊の一員として五輪関連イベントに参加、スペリオパイプ（教育用リコーダー）を吹きながら銀座8丁目から東京駅あたりまで銀座の中央通りを誇らしく行進したものでした。

演奏した曲目は、おそらく鼓笛隊の定番曲だった『希望の虹』や東京オリンピックの歌『この日のために』だったように記憶します。

『この日のために』は五輪開催を記念した公募の当選作品で、『青年の樹』の三浦洗一と『歌のおばさん』と安西愛子が二人で歌っていました。

当時、フジテレビ系で放送されていた桂小金治司会の大型クイズ番組『地上最大のクイズ』では、1000人の解答者がこの日のために鍛えた頭脳で100万円獲得をめざしていましたが、番組の冒頭では毎回、この歌が流れる中、スクールメイツらしき女性たちが五輪の輪を持ちながらチアガール風の白いミニスカート

姿で踊っていました。

先日、銀座の中央通りを歩いてみましたが、銀行以外の建物に日本語

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎 浦松本 絵

が見当たらず、飛び交う言葉も外国語ばかりで違和感を覚えたうえ、昭和43年に黒沢明とロス・プリモスがヒットさせた『たそがれの銀座』で歌われる「二丁目の柳のためいき」も「二丁目の柳のさきやき」も、中央通りに柳自体が見当たらないので聞こえてくることもなく、風情を感じることがありませんでした。

「銀座の柳」は、遡れば明治期から存在していたようですが、いったん銀杏並木に代えられたあと大正12年に関東大震災が発生して並木どころではなくなり、震災の6年後、昭和4年公開の無声映画『東京行進曲』の同名主題歌が復活への口火となります。

映画は不入りだったようですが、「昔恋しい銀座の柳」で始まる『東京行進曲』（歌・佐藤千夜子、詞・西條八十、曲・中山晋平）が大ヒットしたおかげで、昭和7年に植樹が実現。

この年、柳並木復活を祈って『東京行進曲』と同じ西條&中山のコンビで続編のような形で作られたのが、その名もずばり『銀座の柳』（歌・

四家文子）という歌でした。

この歌は大ヒットには至りませんでした。昭和11年の二・二六事件の4か月後、帝都の暗雲を吹き払うように『東京行進曲』をハイカラにした『東京ラプソディ』（詞・門田ゆたか、曲・古賀政男）が登場、藤山一郎が「銀座の柳の下で 待つは君ひとり」と歌い、多くの男女が柳の樹に見守られることになりました。

残念ながら、昭和20年の東京大空襲でこのときの柳もほぼ全滅、細々とながら植樹による再復活を果たしたのは昭和23年で、現在のものは4代目の柳になるそうです。現在、銀座1丁目と2丁目の境にある柳通りの柳は小ぶりなうえ本数も少なくさみしい限りですが、外堀通り（西銀座通り）と銀座8丁目の御門通りに立派な柳が数多く植えられていて、風まかせに揺れている姿は、かつて

の堀端や汐留川の川風を懐かしむかのようにもありません。復興の象徴だった「銀座の柳」が平穏な世の中とともに代々続いていきますように。

